

序

りんくう総合医療センターは、泉州南部唯一の基幹病院であり、全国に4か所しかない特定感染症指定医療機関の一つです。また、泉州救命救急センターや泉州広域母子医療センターを併設し、災害拠点病院や大阪府がん診療拠点病院などの広域で提供すべき政策医療を担う高度急性期病院です。これらの実績が評価されて、平成30年(2018年)4月以降、厚生労働省からDPC特定病院群に指定されています。また、手術や救急医療などの高度専門的急性期医療の提供体制を確保した病院に認められる「急性期充実体制加算」の算定も認可されており、まさに、「地域医療の最後の砦」として機能することを期待されています。

令和5年度には、公益財団法人日本医療機能評価機構が実施する病院機能評価(3rdG:Ver.3.0一般病院2)の訪問審査を更新受審し、令和6年3月8日付で認定を受けました。当センターが、質の高い医療を効率的に提供できていることが客観的に評価されたことになります。

また令和5年度から4年間連続して、アメリカを代表するニュース週刊誌“Newsweek”が毎年発表する世界のベスト病院2026「World's Best Hospitals 2026」日本版において、日本全国の大学病院を中心に200施設の一つとしてランクインしました。りんくう総合医療センターが開院以来スローガンにしてきた「軸足は地域に、視線は世界へ」を診療・研究・教育において実践してきた賜物であります。

さて、令和2年からの3年間は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)入院患者を多数受け入れ、COVID-19患者とその他の一般入院患者の診療を如何に両立させるかに腐心した日々でした。この間に約1,500名の陽性患者の診療に携わりましたが、半数は圏域外の大阪市内や北摂地方の患者で、コロナ禍にあっても当センターが如何に重要な役割を担ったかが分かります。

令和5年度は、コロナ禍という長いトンネルを抜けて、アフターコロナに向けての第一歩を踏み出す年となりました。泉州南部地域で唯一の高度急性期病院としての診療機能の充実を目指し、新たな医療技術の導入を行いました。一部の大学病院や特定機能病院でしか実施できない、難治性の血液がんに対して有効性が認められているCAR-T療法という細胞免疫療法の実施施設としての認可を取得しました。また、令和5年12月には、内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ(da Vinci)」を導入し、これまで他院へ紹介していた前立腺癌など、ダヴィンチ手術の有効性が確立された疾患の治療を当院で完結することが可能になりました。加えて手術室の増室工事を行い、ここにはハイブリット手術装置を設置して、令和6年6月から大動脈弁疾患や胸腹部大動脈疾患に対して、高齢者などのハイリスク患者でも施行可能な経カテーテル的大動脈弁置換術や大動脈ステントグラフト内挿術も施行可能になりました。このように当センターは一層、地域の方々に高度な先進医療を安全に提供できる医療機関を目指してまいります。

今後の医療を取り巻く課題として2040年問題が取りざたされています。2040年に向けて高齢者医療、とりわけ高齢者救急の増加が懸念されますが、生産者人口が急激に減少する我が国において、医療資源を増やすことは不可能でしょう。今後はますます医療の集約化と機能分担が求められることが予測されます。そこで、泉佐野泉南地域では急性期病床を有する救急告示医療機関6病院による連携を強化するために、令和7年6月に地域医療連携推進法人「泉州南メディカルネットワーク」を設立し、大阪府の認可を取得しました。今後はこの泉州南メディカルネットワークを中心に、地域完結型の医療介護システム(地域包括ケアシステム)を構築していく所存です。

この度、令和7年度の年報を編纂しましたので、皆様にお届けさせていただきます。

理事長 松岡 哲也

序

当院は、昭和27年に泉佐野市民病院として病床数71床で開設されて以来、地域の医療ニーズに応じて増床と機能拡充を重ねながら発展してまいりました。平成9年には現在のりんくう地区に新築移転し、平成23年には地方独立行政法人化を経て、さらに平成25年には大阪府泉州救命救急センターの移管を受け、現在の「りんくう総合医療センター」としての体制が確立されました。現在では、救命救急センター30床、感染症センター10床を含む計388床を有し、泉州南部地域における高度急性期医療を担う基幹病院としての役割を果たしております。

院内には、大阪泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、大阪府がん診療拠点病院、災害拠点病院など、多岐にわたる機能を備え、地域医療の中核として重要な責務を担っております。また、平成30年(2018年)には大学病院本院に準ずる高度医療機能を有するDPC特定病院群に指定されるなど、診療の質と実績の両面において高い評価をいただいております。

さらに当院は関西国際空港に隣接する地理的特性から、全国にわずか4施設しかない特定感染症指定医療機関の一つとして、国際的感染症対応にも重要な役割を果たしております。加えて、大阪府外国人患者受入拠点として、外国人患者受け入れ医療機関認証(JMIP)を取得しており、増加する訪日外国人や在留外国人に対しても安心して医療を受けていただける体制を整備しております。このように当院は、地域医療の最後の砦であると同時に、世界にも開かれた医療機関としての使命を担っております。

近年、急速に進展する高齢化に伴い、患者層や疾病構造は大きく変化しており、より安全で身体への負担の少ない医療の提供が求められています。当院ではこうしたニーズに応えるべく、各診療領域において低侵襲医療の推進と最新医療機器の導入を積極的に進めております。内視鏡手術支援ロボット(da Vinci)は導入から4年目を迎え、泌尿器科および消化器外科を中心に昨年度は約140例の手術を実施し、良好な手術成績と早期退院の実現に寄与しております。今後はさらなる適応拡大に加え、呼吸器外科領域への導入も視野に入っております。

また、令和6年(2024年)には血管造影装置を備えたハイブリッド手術室を整備し、循環器領域における低侵襲治療の充実を図っております。これにより、経カテーテル大動脈弁置換術(TAVI)やステントグラフト内挿術といった先進的治療の実施が可能となり、症例数も着実に増加しております。今後はさらに、経カテーテル僧帽弁・三尖弁形成術(M-TEER、T-TEER)、左心耳閉鎖術(Watchman)、心房中隔欠損閉鎖術などの導入に向け、体制整備を進めてまいります。

がん診療においても、外来化学療法室の増床により治療体制を強化し、より多くの患者さんに対応可能となりました。また、本年度より放射線治療専門医を招聘し、放射線治療の再開と質の向上を図ることで、集学的がん治療のさらなる充実を目指しております。

これからの医療は、単に高度な治療を提供するだけでなく、疾病予防から急性期医療、回復期リハビリテーション、さらには在宅医療や介護に至るまで、切れ目のない医療・介護連携が不可欠です。当院単独で担える役割には限界があり、地域全体で支える医療体制の構築が重要となります。昨年度は泉佐野泉南医師会圏域で急性期病床を有する救急告示6病院で構成する「地域医療連携推進法人泉州南メディカルネットワーク」を設立し、「医療・介護に関する連携推進業務を行い、地域医療構想の達成及び地域包括ケアシステムの構築に資する」を理念に今年度から本格的に活動を開始しています。今後もこの地域での行政、医師会、地域の医療機関、さらには住民の皆さまと連携を深めながら、地域包括ケアシステムの中核としての責務を果たしてまいります。

今後も、地域に信頼され、安心して受診していただける病院であり続けるとともに、時代の要請に応じた高度医療を提供し続けるべく、職員一同努力を重ねてまいります。引き続き、皆様のご指導とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

病院長 福田 宏嗣